



海外 博物館 事情

アメリカ



# 博物館・美術館・ 大学図書館・暴力のあと

富澤 達三 (COE研究員・PD)

## はじめに

2004年2月22日から28日まで、第3班の北原系子氏・原信田實氏とともに、アメリカの災害景観に関する社会認識調査を主な目的とし、スミソニアン博物館、ブルックリン美術館、ワールドトレードセンター跡地などを調査した。以下、印象に残ったいくつかの施設について述べてみたい。

### 1 ワシントンにて

<スミソニアン博物館> アメリカの博物館・美術館や大学には、資産家からの莫大な寄付がおこなわれていることが多い。スミソニアン協会が運営する、博物館・美術館・動物園など16の施設よりなった、スミソニアン博物館はその代表である。

研究機関としても知られるスミソニアン協会は、1846年に科学者のジェームズ・スミソンが寄贈した莫大な資金によって設立された。惜しげもなく莫大な財産を寄付し、富の還元を行なうことも、アメリカンドリームの一つの典型なのだろう。日本の企業家たちとのスケールの違いには、ただただ驚くばかりであった。以下では系列の2館を紹介する。

国立アメリカ歴史博物館は、アレキサンダー・ベルの電話機やトーマス・エジソンの蓄音機・電信機など、アメリカの生んだ独創的発明がひとつの目玉となっている。そのほかに、かつてNHKで繰り返し放映されていた『大草原の小さな家』を思わせる開拓時代の民家、アメリカの歴代大統領の展示も目をひいた。

大衆文化・サブカルチャーの展示も力が入られ、エルビス・プレスリーのステージ衣装、スーパーマンのコスチュームなどの展示があった。近年、日本の博物館でもサブカルチャーに関する展示が行なわれつつあるが、総じて概説的なものが多い。しかしながら、充実したモノ資料を示し、特定のサブカルチャーがどのような歴史的文脈で形成され、地域や個人がそれをいかに享受し影響を受けたのかが明らかにされれば、近現代展示の新たな可能性が拓けるだろう。

アメリカ自然史博物館は、質・量ともに充実し、特に災害関係の展示を重点的に見学した。地球上のプレート構造、震源分布などがビデオ・CGなどで展示されるが、地震国である日本と異なり、地震災害に関する展示は簡略。各国の地震災害として阪神大震災の被害写真も紹介されていた。

### 2 ニューヨークにて

<ブルックリン美術館・コロンビア大学> ここでは、歌川広重『名所江戸百景』を熟覧した(写真1) いずれも状態の良い名品で、原信田氏の「『名所江戸百景』には、安政江戸地震(1855)の破壊から復興する江戸を描いた作品が多い」との新説の実証に、大いにプラスとなったようである(原信田實・北原系子「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、2004、参照)

ブルックリン美術館調査後、コロンビア大学に原信田氏旧知のヘンリー・スミス教授を訪ねた。同大学には東洋関係の文献を集めた専門図書館があり、見学する。我々のような、たまたま立ち寄った外国人研究者でも、自由に図書館に入って本の閲覧が出来た。近年は改善されつつあるが、日本の大学図書館では、紹介状が無ければ閲覧はおろか入館すら出来ないことがあり、その差を痛感する。図書館の一階ホールでは日本の大衆文化の紹介として、『ゴジラ』シリーズのポスター展示が行なわれており、意外なことにそれらも図書館の所蔵品であった。

<メトロポリタン美術館> 収蔵品は500万点を越えるともいわれる世界屈指の美術館である(写真2)。日本語によるオーディオガイド・展示ツアーがあり、当然日本語版パンフレットもある。これは館全体の見取り図と各展示の概略を説明した簡便なもので、初心者はこれを手がかりに選び抜かれた展示品を見ていくのが良いだろう。

<エンパイアステートビル> 毎年350万人を超える観光客が訪れる、ニューヨーク観光のメッカ。アメリカを象徴する建造物でもあり、1986年には重要文化財に指定された。102階建て443mの高層ビルだが、1931年にわず

か1年2ヶ月弱の工期で完成している。

有料エレベーターで102階の展望台に着くと写真撮影に誘導され、頼みもしないのにシャッターを切られた。有料とは知らず、キャピネサイズ1枚20ドル近くもして、まんまと儲けられてしまった。

展望台からの眺めはまさに絶景。生来高い所好きの私だが、どうも落ち着かない。エンパイアステートビルは当時の最新鋭技術が結集された、堅牢な建物であるが、ニューヨークは地震が少なく、日本のような免震構造に工夫を凝らした建物では無いように思えたからである。

<ツインタワー跡> 2,500人以上が亡くなった人災の跡地は高い柵に囲まれているが、中は柵の間から見る事が出来る。内部は、十字架状に残った瓦礫が保存される以外、雑然とした工事現場となっている（写真3）。

ツインタワー崩壊のあおりで周囲のビルのいくつかは未だ工事中であった。観光客を目あてにしたツインタワーのミニチュア模型を売る露店や、9.11事件の写真集を

売る男性もあり、事件が過去のものでないことを知らされた。今後も年ごとの鎮魂行事やモニュメントの建設が行なわれるであろうが、日本の地下鉄サリン事件（1995）同様、何故テロが引き起こされたのか、どのようにすれば再発を防げるのかについて、根本から考えねばなるまい。

おわりに

今回の調査では、アメリカの博物館・美術館、そしてテロの跡地から、さまざまな「ちから」を感じた。それらは、社会的成功者の莫大な財貨の力であり、大切な展示品を出身や言葉の異なる人々に理解してもらおうと奮闘する力である。そしてまた、長年にわたる政治的圧力へ肉体言語を以て己の信じる正義を突きつけた暴力であり、そのような理不尽な暴力に対し敢然と異議を唱えた、小さいながらも数多くの力（写真4）であった。

私にとっては初めてのアメリカ滞在であったが、異国の社会が放つ圧倒的な「ちから」を、まさに全身に感じることが出来た。

写真1



『名所江戸百景』の熟覧調査（ブルックリン美術館）

写真2



メトロポリタン美術館

写真3



ツインタワー跡地に残る「瓦礫の十字架」

写真4



ツインタワー付近にて

写真はすべて原信田貴氏撮影。